なかったのではないだろうか。結論は今後の調査を待ちたい」と記したが、矢張結果はその推知通り写真からの模写であった。小山と田村宗立との模写力の差を改めて実感させる、印刷局で撮影された写真からの作例であることが、現存している写真から判明した。

また印刷局で最も早く製作された石版画《シーボルト肖像》（神戸市立博物館蔵）は、時のイタリア公使コント・フェの依頼により、キヨソネが原画を描き、青野桑洲や石井鼎湖に石版技術を指導した石版印刷師チャールズ・ポラードによって明治八年に製作されたものである。先日たまたま『シーボルト家の二百年展』（長崎市立博物館ほか、平成八年五月）の図録を見ていると、その中にシーボルトの肖像写真があり、その説明書きに

「シーボルト胸像が、一八八二年にヴェルツブルクで建立されている。伊藤圭介らが、その資金を日本で募った時、募金者に対してシーボルトの肖像を描いた石版画を記念品として配った。この肖像写真は、その石版画と構図がよく似ている。このことから、この肖像写真は、石版画の原図と考えられる」

と記されていた。

この奥床しい指摘はおそらく間違いない事実であろう。原画からの複製技術に長けていたキヨソネにとって、写真をほぼそのまま寸分違わず模写することなどさして難しい注文ではなかったであろう。それほど写真とそっくりに作られた石版画である。それに何のためにこの肖像画が製作されたのかかねがね疑問に思っていたことも、勿論それは私が単に知らなかっただけのことだが、一挙に解決できたのはうれしい限りであった。

一枚の販売広告から取り留めもなく書き連ねたが、タイムカプセルのように百二十年前の近代日本の息吹が籠められている引き札との、コイン市での貴重な出会いであった。

（なお「石版畫ビートルノ圖」を筆者は未見である。知見の方があれば、どのような作品なのか是非共御教示願いたい。）

山中節治拾遺

森　仁史

山中節治という建築家について書いてみたい。

山中のことが気になりだしたのは蔵田周忠を調べ始めてからだった。かつて「田園と住まい」（世田谷美術館、一九八九年）のなかに、蔵田周忠が取り上げられたとき、図録にそのポートレートとして掲げられた人物がどうしても私の知っている蔵田に思えず、人違いではないかと感じ、これは誰なんだろうと気になったときからである。後に、これが山中節治だと分かったのであった。そして、山中について知るにつれて、この二人がとても近しい存在であり、ある時代的な雰囲気を代表しさえする位置にあったことを知ることになった。その後、山中の名を目にしたのは、つい最近神田で見つけた『ヴヰーナス建築図集』（洪洋社、大正十年）でだった。これは殆どがペーター・ベーレンス、アルビン・ミューラーの作品を紹介するもので、いかにも分離派好みの編集である。手にとったのが山中建築事務所の旧蔵書であり（図1）、このとき山中に背中を押されたように感じたのだった。

まず、雑誌『国際建築』である。この雑誌は一九三〇年代にはインターナショナル・スタイルの実践とモダン・デザインの実験にきわめて大きな役割を果たしたことで知られるが、初めは大正十四年（一九二五）に『国際建築時論』として、今井兼次、今和次郎らの早稲田系の人々によって創刊されたのだ。この雑誌が少々風変わりなのは工手学校生徒を読者として意識していたところだろう。震災復興の建築ブームのなかで、官庁や建築会社で設計を担当する学士様の手足となって現場に指令を伝えたり、設計者の助手を勤める人材が大量に必要であった。例えば、帝大教授の手弁当

で設立された工手学校は明治二十二年の第一回卒業生以来、大正十四年までに建築土木をはじめとする七十一期一万五千五百二十人の卒業生を数えていた。その後、法政大学や早稲田大学にも同様の工手学校が設立されていた。昭和三年（一九二八）一月より発行主体が国際建築協会に替わり、誌名を改称したのだった。同協会同人は編集実務を担った小山正和のほかに、蔵田、山中、菅原栄蔵、青山忠雄、能勢久一郎、丹羽美らがいたが、編集部は京橋区桶町の山中節治建築事務所に置かれた。山中は表紙のデザインも担当し、文字通り同誌を支えていた。

この頃のかれの活動を伝えるのが処女作『建築図案　文化生活と其の住宅』（建築書院、大正十二年）〔図2〕である。これには佐藤功一が序文を寄せ、今和次郎は序文と山中の肖像スケッチ〔図3〕を寄せている。今は「山中君はすらすらと片つぱしから仕事をかたつけ行く方々の懸賞には大抵賞にあたる。うらやましい程の才能をもつている人である」とまるで手放しで誉めている。しかし、山中は最初からエリートコースを歩んだ建築家ではなかった。大正三年工手学校建築科を卒業し、大正の終わりに選科生として、早稲田大学で佐藤功一の指導を受けたのであった。これは蔵田の経歴（大正二年工手学校卒、十年早稲田大学理工学部選択研修）と全く同じである。

工手学校を出て少し後の頃、恐らく大正四、五年から大正末頃に二人は同時に関根要太郎事務所に在籍していたことがある。そんな大正九年（一九二〇）四月に蔵田は山中から『独逸古城集』を見せてもらい、「独逸の古城」と題する詩を詠い、山中がそれに挿絵を寄せて『建築評論』に発表している。まさに一心同体だったのだろう。二人より年嵩の関根は大正三年七月に工業教員養成所建築科選科を修了している。関根の自伝『生ひ立ちから今日まで』に依れば、関根はこれ以前に「私学の工業学校に学び」、三橋建築事務所に勤務していた。そうして、「蔵前の高等工業学校」に入ったと述べているが、同じ敷地ではあっても、かれの入った学校は別な学校の選科であった。この学校は地方の工業学校や補習学校の教員を養成するためのいわば師範学校に相当するもので、授業料が免除されていた。当時の苦学生が学ぶことの多かった学校である。関根は東京大正博覧会（大正三年）に「浜辺住宅設計図（はまべのすまい）」と題する塔屋にテラス付という風変りな和風住宅案を出品しているが、これが最初の作品発表だった。この三人に共通しているのは沸騰するモダニズムの時代をその腕を頼りに駆け抜けたことであろう。

しかし、下働きの生活のなかからでも、自己の理想や夢を絵として描く才能に恵まれていれば、この時代にはそれが認められるチャンスがあった。蔵田と山中は大正六年の第五回国民美術協会展に前年当選した「米国住宅競技図案」を出品した。八年にはミネルヴァソサエティ展に山中も蔵田も

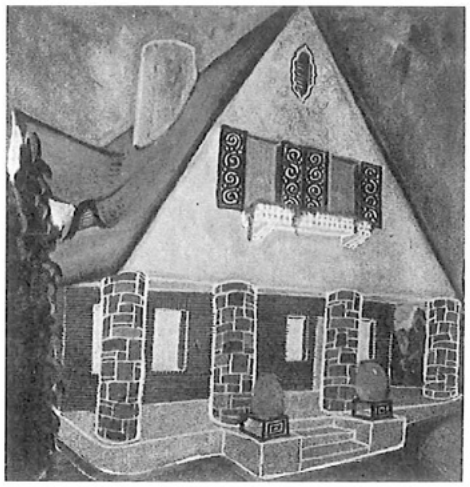
1　『ヴヰーナス建築図案集』中央に山中のサインがある

2　山中説治『建築図案　文化生活と其の住宅』

3　今和次郎「山中説治ポートレート」

出品している。前記の山中の作品集は「私が常に好んで感興の折々に試作したもの、或いは依頼者の為に実際に建てらるゝものとして設計したもの、又は同様の目的で幾つも自由に約束しなしに設計したもの等」を収めているのだが、多くは最初に挙げた分類に属し、殆どが小家族向けの住宅である。各案には図面のほかに必ず水彩や鉛筆などによるドローイングが添えられている〔図4〕。

日本の住まいの変化がほぼ五十年をかけて欧風化の方向に定着するなかで、山中の設計は家族生活の形態や他の衣食生活の合理化、欧風化を支える姿勢が顕著である。それが山中の考える「文化生活」だったのだ。そのスタイルはユーゲントシュティールから表現主義に及ぶもので日本の一九二〇年代の嗜好と雰囲気をよく表している。そこにはダルムシュタットやアーツ・アンド・クラフツの影響が濃厚である。住まいや新しい生活への憧憬の具現化は山中のような設計者の得意とするところだったろう。そのためには、詩的な情景を描ける腕が必要だったし、それこそが山中や蔵田に名を成さしめたのであった。



4　山中説治「丘の上の家」

5　山口文象「国民美術協会主催
仏蘭西現代美術展覧会門」

6　蔵田周忠「同　展示塔」

同じような経歴の持ち主である山口文象にすらそうした時代があった。否、むしろそうした才能ゆえに頭角をあらわしたとすらいえるのだ。大正十一年（一九二二）の仏蘭西現代美術展の屋外看板〔図5・6〕は蔵田の依頼で山口が仕上げたものだったが、若き日の山口の熱情したものが蔵田や山中と極めて近しいところにあったことを如実に示している。

それが日本一九二〇年代の特性であったとして、かれらの素地が一九三〇年代以降の機能主義や合理主義の洗礼を浴びるとき、作家の個性と夢だけではなく別種のモダンへの志向の論理が求められることになるだろう。『国際建築』の編集だけでなく表紙デザインも蔵田が担当する一九三〇年代に入る頃、山中の名は同じ舞台に見出せなくなっていた。

一寸

第六号　二〇〇一年四月

第六号目次

新・旧刊案内6　三雲祥之助・高見順・『百穂手翰』　青木　茂　1
竹村猛児—或る小児科医の版画—　岩切信一郎　5
残されたひとやま《新議事堂》—藤牧版画の後摺りについて4　大谷　芳久　9
目録にない図画教科書（六）本多錦吉郎『図画新篇　山水之部』（明治二十八、二十九年）　金子　一夫　14
李仲燮のこと—徐知賢さんの研究より—　李仲燮年譜（徐知賢編）　丹尾　安典　17
印刷局の引き札　銅・石版画遺聞6　森　登　22
山中節治拾遺　森　仁史　26
お札博士スタールの記5　古本歩き・横浜の巻Ⅵ　山田　俊幸　29

新・旧刊案内6

三雲祥之助・高見順・『百穂手翰』

青木　茂

この年になると、ひとつの事を考え調べるには脳細胞も体力も衰えて、判断中止と探索中止命令がすぐに出る。それを押し隠して若ぶったり新らしぶったりするのは老醜なことがようやく解った、ようやく解ったなどと言うことがすでに老醜であることも解るような気がする。で、これからは（これまでも、でもあったが）思い付いた美術関係の図書のことをとりとめなく書くことにする。

前号に書いた島田洗耳に随筆集『雲雀野』がある。昭和十五年九月の私刊本で「非売、百五十部限定毀版」というものである。袋綴じ二百ページ余りの「装幀、挿図、編輯、校正みんな一人でやった」図書で、変った箱に入っている。著者はこの年四十歳で「書、画、歌、印の四道は私の生命である」という人なのに、僕はその一樹四枝の一枝をも見ていない、どこかで偶然（偶然でなければならぬ）この人の一芸でも見たいと思って既に長い。芸歴も知らない。ただ随筆のなかに「初期洋画の大家田村宗立翁は晩年知恩院山内に隠棲されて、専ら日本画を描いて居られた。子供の頃小学校の友人がこの翁の書生をしてゐた様な関係でよくそのお宅へ遊びに行ったものである」とあって「ほう」と思うばかりである。どこかで偶然この人の詩書画三絶に印章まで押した作品に邂逅したら、百穂論などは面白かったはずの中国文人趣味のこの随筆集を改めて読んでみることにしよう。ただし、昭和十五年という年に、このような有閑無益な贅沢な本が出版されていたことは記憶されてもよいだろう。

こんな同人誌をも注意して見てくれる野地耕一郎さんに先日お会いした